

未熟児センター内保育に家族が早期に関与 することの親子・家族関係に及ぼす影響

○山 本 勇 志(福井県立病院)
春 木 伸 一(")
荒 川 朱 実(")
橋 本 幸 子(")
渡 辺 嗟恵子(仁愛女子短大)

我々は、昭和53年以降、maternal infant bondingを確保する目的で、未熟児センターに入院した未熟児及び障害を持つ可能性のある新生児に対し、早期より家族をセンター内に導入して、保育にかかわらせるようにしてきた。この間5年、対象となった新生児406人中、保育への家族の早期導入について生後1週間以内から、母または家族が毎日または少なくとも隔日に来院して、直接子供の保育に携わることのできたグループ(以下導入群という)は、47人に達している。上記の基準を満たさなかったグループ(非導入群)は、平均週1回程度の来院となっている。この試みにおいて、我々が検討したのは次の項目である。

I. 導入により感染の危険が増えるか。

II. 導入は本当に母の児に対する受け入れに有用であるか。

I に対しては、家族の手洗い・ガウンテクニックを十分に監督指導する限りは、室内汚染も増加しないことを、室内落下細菌数、インクペーター内細菌数、児の鼻咽頭培養によって確かめた。更に臨床的にも導入開始以前と比べて、合併感染症が増加していないことを確かめ得た。

II の効果については、

- ① ナースが家族に接して受けた印象は、明らかに導入群において、退院時の母の受け入れは良好であった。
- ② 退院後の care の不十分さに影響をうけると考えられる再入院の頻度について調べた結果導入群が抜群に優れていた。

このナースのうけた印象を客観的に確かめようと思うのが、次年度以降の計画であった。母親の児に対する受け入れ態度を客観的に評価するには、それに適当な指標を必要とする。私達は、福井県

でそれを作製し、福井県の母親の育児態度の標準像をつくり、これと我々の扱った未熟児の導入、非導入群を比較したいと考えたのである。ここにおいて我々の56年度以降の仕事は大きく二つの方向に分かれた。

1. 福井県の母親の育児態度の標準像の追求、母親の行為を Symonds の X軸 acceptance - rejection, Y軸 dominant - submission に投影させる原理をとり入れ作製した質問紙(幼児用及び乳児用)を使用して、幼児は各地の幼稚園、保育園の協力を得て、県全域にわたる1937人を対象として行い、乳児は県下9保健所の保健婦の協力を得て、乳児検診の場で調査を行った。その数、乳児865人。労力の関係で今回の目的に必要な幼児の資料をまず整理し、次の結果を得た。

- ① 福井県の母親の平均した育児態度は、調査用紙を作製したチームの期待よりは、X軸(-)、Y軸(+), 即ちきびしすぎの方向に片寄っている。
- ② これを年令別に展開するとY軸は各年令とも(+), 即ち支配的であるが、X軸, 即ち受け入れに関しては幼い方から(+→-)に分布しており、この設問の内容が妥当であることを示すと同時に、これを基準として使うときは、年令別に比較する必要のあることが示唆された。
- ③ 育児態度に及ぼす地域差、その他の条件の影響についての検討は、渡辺が主として担当し、仁愛女子短大紀要に発表し、また投稿中である。
- ④ 乳児の資料については、次年度に整理し、これ等の結果を保健所を通じて地域に還元する子定である。

2. 退院未熟児の予後調査と導入効果の判定

- ① センター退院未熟児の質問紙及び面接による調査を行い、358名中221名(61%)の返信を得、その58%に当たる131名に面接を行うことができた。その内導入群は29名である。子後の調査としては、面接により確かめた結果、1～2才では発達がやや劣る(DQ平均94～96)が、2才を越えるとIQ平均100以上を示し、よい発達をしていることを認めた。しかし、母親の発達に対する思いは不安がつよく、それは在胎週数及び生下時体重の低い症例に多かった。これ等は、荒川が主として担当し、その詳細は更に一つの研究としてまとめる予定である。
- ② 母親の育児態度、受け入れに関する検討
 - a) 未熟児群の母親は一般児群と比べてX軸で(+)を示す価が大きく、受け入れ的である。
 - b) 導入群と非導入群とでは、導入群の方でX軸上の(+)の価は大きく、より受け入れ的であることを知り得た。

c) 面接

以上、未熟児センター内保育に早期に家族を導入することは、感染その他のデメリットは少なく、母の受け入れに関して有用であることの結論を得た。

今後の課題

1. 今回得られた福井県の母親の育児態度の年齢別基準を地域に還元して、母親を指導する一つのスケールにしたい。
2. 乳児に関する資料を整理して同様の目的を果たしたい。
3. 導入群の症例を増やすと共に、今回除外した口唇裂、その他の奇形をもつ症例についても調査したい。
4. 昭和58年度完成の未熟児センターの設計は更に導入を容易にするような工夫を行った。
5. NICU用Drカーを整備することにより(予定)、今後ますます遠距離から搬入される未熟児に対して、導入をどうするか考えたい。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



我々は、昭和 53 年以降、maternal infant bonding を確保する目的で、未熟児センターに入院した未熟児及び障害を持つ可能性のある新生児に対し、早期より家族をセンター内に導入して、保育にかかわらせるようにしてきた。この間 5 年、対象となった新生児 406 人中、保育への家族の早期導入について生後 1 週間以内から、母または家族が毎日または少なくとも隔日に来院して、直接子供の保育に携わることのできたグループ(以下導入群という)は、47 人に達している。上記の基準を満たさなかったグループ(非導入群)は、平均週 1 回程度の来院となっている。この試みにおいて、我々が検討したのは次の項目である。